

心理発達科学専攻教官の研究状況報告

最近の研究経過報告

吉 田 俊 和

紀要担当者から研究経過報告の執筆を促されたので、6年ぶりに報告いたします。多忙を理由にパスしていましたが、研究内容も変化しているので、5年に一度くらいは報告義務があるだろうと言うのが正直なところです。

1. 社会的迷惑に関する研究

5年ほど前から9名のメンバーで「社会的迷惑行為」に関する研究に着手した。最初のテーマは、人々が社会的迷惑行為をどのように認知（構造化）しているのか、どのような個人特性を持つ人が迷惑を感じやすいのか、についてであった。その成果は、1998年度の日本グループ・ダイナミックス学会での研究発表およびワークショップ（社会的迷惑行為を考える―多様なアプローチを探る―）で議論された。次に取り組んだのは、人々が感じる社会的迷惑の根拠がどのような理由に基づいているのか、についてである。さらに、社会的迷惑行為に対する対処法は、各個人が持っている社会考慮や社会認識とどのように関連するのか、についてであった。ここまでの研究成果は、1999年と2000年に刊行された名古屋大学教育学部紀要（心理学）と教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）に掲載されている。また、「社会的迷惑」の研究が学会でも話題になり、2000年度の日本グループダイナミックス学会の大会シンポジウムとして「社会の中の迷惑を考える」が行われ、筆者はシンポジストとして、話題提供した。

2. 中学生を対象にした「ソーシャルライフ」の授業実践

一方、研究の進展につれ、研究会の4番目のサブテーマとして、社会的迷惑行為の抑止策が浮上した。その方法論として、「人間」や「社会」に関する教育の可能性を模索することになった。具体的には、「人の行動のしくみ」、「対人関係」、「集団や社会」に関して得られた社会心理学的な知見を体験的に教えることにより、社会的コンピテンス（対人関係能力、集団や社会への自律的適応力）や社会志向性を高めることが目的である。そこで2000年4月より、他大学教員3名と大学院生4名を含め

て授業例の作成に着手し、隔週土曜日に2時間連続の授業として、すでに1年生を対象に30時間、合計15回の授業を実施した。本年4月からは、2年生を対象とした授業例を作成し、8時間分4回の授業を実施している。この授業プログラムの開発には、膨大な時間を要した。研究者チームが何回か素案を検討し、最終的に作成したものを附属中学校の担当学年団の教諭5名にチェックしてもらい、やっと2時間分1回の授業例が出来上がる。こうした成果を元に、本年9月に開催された日本教育心理学会では、「社会志向性と社会的コンピテンスを教育する」というタイトルでシンポジウムを主催した。予想以上に現職教員の関心は高く、その要望に応えるため、明治図書から『「教室で学ぶ」社会の中の人間行動』というタイトルの本を来年3月に出版する。また、2000年と2001年の教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）にも授業実践例が掲載されている。

3. 大学生の適応過程に関する研究

1997年4月に名古屋大学教育学部に入学した学生を対象に、彼らの社会化のプロセスを縦断的に検討した。調査回数は1年次5回、2年次4回、3年次3回、4年次2回の合計14回であった。調査対象者には1年次の授業時に目的等を説明し、納得の上で協力してもらった。毎年度の最後の回には、謝礼として図書券を配付した。調査の内容は、①学問に対する態度、②集団アイデンティティ、③社会的スキル、④ライフイベント、⑤職業志向性と自己能力評価、⑥クリティカルシンキングに関する尺度、⑦メンタルヘルス、⑧ソーシャルネットワークである。これらの要因の縦断的变化と要因間の関連から、彼らの大学への適応過程を明らかにしようとした。成果は、2年間分のデータのまとめが1999年の教育学部紀要（心理学）に、4年間分のデータのまとめが2001年の研究科紀要（心理発達科学）に掲載されている。

4. その他

―共編著―

吉田俊和・松原敏浩（編） 1999 社会心理学―個人と

集団の理解― ナカニシヤ出版
速水敏彦・吉田俊和・伊藤康児（編） 2001 生きる力
をつける教育心理学 ナカニシヤ出版
―分担執筆―
中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・

立花政夫・箱田祐司（編集）1999 心理学事典（6
項目） 有斐閣
山岸俊男 2001 社会心理学キーワード（第7章） 有
斐閣

研究状況報告 ― 2000年10月～2001年10月 ―

岡 田 猛

(1) 研究業績

印刷中および発行済み（2000～2001）

編著

- ・植田一博・岡田猛編（2000）。「協同の知を深める：創造的コラボレーションの認知科学」共立出版
- ・K. Crowley, C. D. Schunn, & T. Okada (Eds.) (in press). Designing for Science: Implication from everyday, classroom, and professional settings. Mahwah, NJ: Erlbaum.

論文および著書（分担執筆）

- ・Schunn, C. D., Crowley, K., & Okada, T. (in press). What makes collaborations across a distance succeed?: The case of the cognitive science community. In P. Hinds & S. Kiesler, Distributed work. Cambridge, MA: MIT Press.
- ・Schunn, C. D., Crowley, K., & Okada, T. (in press). Cognitive science: Interdisciplinarity now and then. In S. J. Derry & M. A. Gernsbacher (Eds.), Problems and promises of interdisciplinary collaboration: Perspectives

- from cognitive science. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- ・Okada, T. & Shimokido, T. (2001). The role of hypothesis formation in a community of psychology. In K. Crowley, C. D. Schunn, & T. Okada (Eds.) Designing for Science: Implication from everyday, classroom, and professional settings. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- ・岡田猛・高城早和子（2001）. 心理学の研究におけるドキュメンタリー的な情報の利用可能性 やまだようこ・サトウタツヤ・南博文（編） カタログ現場心理学：表現の冒険 金子書房
- ・Schunn, C.D., Crowley, K. 岡田猛（2000）. 認知科学：その学際性について 植田一博・岡田猛（編）協同の知を深める：創造的コラボレーションの認知科学 共立出版

(2) 学会活動

編集委員

Psychologia Society “Psychologia : An international Journal of Psychology in the Orient”

研究状況報告 ― 2000年10月～2001年10月 ―

中 谷 素 之

最近1年間の研究経過を以下に示す。この1年は、さまざまな業務の中でようやく自分なりのペースをつかみかけてきた時期であったように思う。当然のことであるが、大学院時代に比べ時間的な制約が厳しいため、限られた時間でいかに効率的に研究や調査を行うかが重要であると考えている。動機づけを研究テーマとしている以

上、自分自身が“動機づけられている”ことが必要だと思うのだが、実際は怪しいものである。今後は“動機づけの維持と自己調整”が自身のテーマかもしれない。

1. 社会的責任目標に関する研究

教室という社会的文脈における学業達成過程に関する